



京大広報

号外

2014.4

目次

〈入学式〉

- 学部入学式における総長のことば……………4154
- 大学院入学式における総長のことば……………4156

〈大学の動き〉

- 平成26年度学部入学式……………4158
- 平成26年度大学院入学式……………4159



平成26年度 入学式

入学式

学部入学式における総長のことば

平成26年4月7日

総長 松本 紘

本日、疏水の碧に映える満開の桜に彩られたここ「みやこめッセ」に参集の3,024名のみなさん、京都大学に入学おめでとうございます。ご来賓の井村裕夫元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長、列席の副学長、学部長、部局長、および教職員とともに、みなさんの入学を心よりお祝いいたします。同時に、みなさんの日々の研鑽が見事に実を結びましたことに敬意を表します。そして、これまでみなさんを支えてこられましたご家族や関係者のみなさまにお祝いを申し上げます。

平成23年3月11日に起こった東日本大震災による国難は、3年を経て、今なお続いています。国を挙げての復旧や復興はいまだ途上に過ぎず、福島第一原発事故はその収束の目途すら十分にたっているとは言えません。被災地から離れた京都においても、長く心を寄せ、被災地の苦難を我がこととし、復旧と復興を積極的に支援し続けていかなければなりません。今日、本学に入学するみなさんはこのことを肝に銘じ、自ら行いうる貢献を改めて考え、主体的に行動することを希望します。

さて、みなさんは、入学後の様々な可能性に心躍らせ、今日を迎えていることでしょうか。多くの京都大学OBの皆さんが、好きなことに贅沢に時間を使ったのが大学時代であったとその自由を懐古します。サークル活動やボランティア活動や趣味などに没頭できることは大学生活の一つの側面です。しかし、いま勉強することはそれにもまして重要なのです。

世界で活躍している本学の卒業生と話をすると、みなが異口同音に言われます。「大学でもっと勉強しておけばよかった」。みなさんは厳しい学力検査を



経たばかりで、勉強なんてもうこりごりと思っているかもしれません。また、長い人生のうちで勉強などその気になれば、いつでもできると思っているかもしれません。先輩方もまたそう思ったのでしょうか。しかし、それならどうしてやがて同じような後悔を多くの人が口にするのでしょうか。

そもそもみなさんは、なぜ勉強しなければならないのでしょうか。勉強している最中にはその理由はなかなかわかりにくいものです。一つには次のように考えられます。大学で学ぶことは将来を通じて学ぶ基礎となる。すなわち、人間の歩みとともに蓄積されてきた人類の英知の宝庫を開く鍵を手に入れることが、これまで受けてきた教育以上に、大学での学び、とりわけみなさんの直ちに受ける教養教育によって可能となります。そして、そのような基礎作業は頭が柔軟なうちに体系的に済ませておくことが極めて効果的で、その過程は樹木が時間をかけて徐々に生長することに似て、それなりの時間と集中を要するのです。確かに現代社会においては、一生学び続けなければ、日々変わりつづける社会の動きについていくことすら難しいでしょう。そして、大学生活を除いては、この学びの基礎を築く時間は、実はほとんどないことが、年を経るにつれしみじみと痛感されるといったところではないでしょうか。

しかし、私は学問をするということはそれだけではないと思っています。江戸時代の教育について書かれた本を^{ひもと}く興味深い事実気がつきます。そ

これは日本各地に存在した寺子屋の多さです。昨年度の学校基本調査によると現在小学校は全国に21,131校ありますが、江戸時代の末期にはこの数を優に超える寺子屋が我が国にあったと推測されています。これはある意味不思議なことです。科举制度のあった中国とは異なり、勉強したからといって、そのことで日本では直ちに自己の立身出世に役立つわけではなかったのです。なのに、民間の寺子屋が我が国の津々浦々にあった。そして、寺子屋では、立身出世といった何かの「ため」に学問をするのではなく、他の大事な機能が期待されていたのではないのでしょうか。最近、江戸時代中期に活躍した思想家石田梅岩の「都鄙問答」に「仏老荘ノ教エモ、イハバ心ヲミガク、磨種ナレバ」という文章があることを知りました。すなわち「仏陀や老子や荘子の教えも、いわば心を磨くための材料、磨ぎ種なので」と言っているのです。すなわち、勉強することには、学問によって自分を磨くことが期待されてきたというわけです。この教育観は、武術や芸術といった様々な技芸にすら理想形への道のりである道を見出し、その道を求め、求道し、人として完成することを志向する我ら日本人の姿にうまく重なります。

また、読み・書き・そろばんや人としての矜持といった当時の初等教育の充実が、明治維新後に西洋の先端技術を直ちに吸収同化できた素地でもありました。そして、西欧列強に肩を並べるために、急速に進めざるを得なかった教育体制の整備は、健全な競争を通じ、適材を広く集めることに当初は成功してきました。しかし、一方で学問によって身を立てるという風潮をもたらしてしまいました。この傾向は大学が大衆化した現在、その勢いをさらに増しているように感じられます。いまこそ、江戸時代から連綿と続く、学問によって心を磨くという日本人の大切にしてきた考えを思い起こすときです。みなさんにも大学において学問を通じて心を磨き、人として成長していただきたいと思います。

さらに、みなさんは時代が要請する国際性を養う

必要があります。それは単に外国語ができるということではなく、歴史に学び、自国の文化や日本人の矜持をしっかりと背景に持ちながら、自分の考えを国際社会で主張できる論理的な思考能力、発信能力、自分の意見を恥ずかしがらずに言える積極性や自主性を備えることにほかなりません。そのためには練習や経験も必要です。ぜひ大学時代に、十分に練られた計画と準備のもと、海外留学も経験してほしいと思います。大学として体制を整備、充実させ、みなさんの雄飛をできる限り支援したいと思います。

最後に、伝統を基礎とし革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学を目指して、大学の教育・研究環境を一層充実させていきます。本日ご臨席のご家族や関係者のみなさまには、引き続き、本学へのご支援や応援を切にお願い申し上げます。

入学生のみなさんには、芭蕉の次の句をお贈りします。

としどしや 桜をこやす 花のちり

今日から始まる大学生活において素晴らしいときを過ごすとともに、自身の経験を肥やしとし、美しい花を毎年咲かせ、その繰り返しによって大木となれんことを祈念し、私の入学式の式辞とさせていただきます。

京都大学への入学、誠におめでとうございます。



大学院入学式における総長のことば

平成26年4月7日

総長 松本 紘

本日、京都大学大学院に進入学される修士課程2,210名、専門職学位課程324名、博士後期課程898名のみなさん、おめでとうございます。列席の副学長、研究科長、学館長、学舎長、教育部長、および教職員とともにみなさんの進入学をお祝いしたいと思います。また、これまでみなさんを支えてこられたご家族や関係者のみなさまに心よりお祝いを申し上げます。

平成23年3月11日の東日本大震災からすでに3年が経過しましたが、この国難からの復旧や復興はまだ道半ばに過ぎません。とりわけ福島第一原子力発電所事故は収束の目途も十分に立っていないこの時期に大学院で学ぶことをみなさんは片時も忘れてはなりません。そして、被災地から離れた京都においても、被災地に長く心を寄せ、その苦難を我がこととし、大学人として、また個人として、被災地を応援する決意をここに新たにしたいと思います。

さて、みなさんが進む修士課程では、学士課程で身につけた知識や教養に加え、さらに基礎的な知識を補いつつ、研究のために必要な専門知識と技術を身につけるなど、専門家に向けた体系的な教育が行われます。また初めての研究論文の執筆となる修士論文の作成を通じて、問題の発見から答えの導出に至る一連の過程を経験し、新しい価値の創造がいかに行われるかを体験することになります。この創造的な過程を経験しておくことは、社会で様々な問題を解決するためのよいトレーニングになります。専門職学位課程では、高度の専門性を必要とする職業などに従事する人材を育てるために、理論と実務との橋渡しを行う教育課程の中で学修が進められ、国際的に活躍する人材の養成が行われます。博士後期課程では、修士課程までに修得した知識や技術



を基礎に、自ら研究計画を構想し、独創的な研究を遂行し、学術誌などにより研究成果を国際的に発信できるように指導が行われます。博士後期課程は研究者を養成するだけではありません。日本では学界以外では、博士号を持っている人はまだまだ多くはありません。一方、世界の政界・官界・実業界においては、博士号を持ったリーダーが颯爽と活躍していることはそう珍しいことではありません。研究といった創造的過程を経験し、新たな価値を創造しうるリーダー層が社会を変革していく、そのようなことが新たな世界標準になりつつあります。世界の舞台に躍り出、日本のさらなるガラパゴス化を止めるのはみなさんです。

これより、修士課程のみなさんは基盤を築くために、専門職学位課程や博士後期課程のみなさんは専門家として独り立ちできるように専門に没頭してください。没頭する時期が無ければ研究の突破力は生まれません。それがなければ花は開きません。

みなさんはこれから研究室に入って先生方と話をし、研究室の強みを十分理解した上で、自分は何をしようかと考え始めることになると思います。研究室に所属するということは時として、枠から外れないように自己規制を行う危険も秘めています。そもそも大きく外れるのであったら、違う研究室へ行ってははずです。その意味で、研究室のスタイルにある程度共鳴してその研究室へ行ったことにはなりますが、そうするとその中で研究というのは途端にかなり狭くなりがちです。そして、その限定された

範囲で研究をしようと思ったら、それはかなり集中しないものになりません。みなさん同様に既に研究分野をかなり限定して頑張っている仲間や先輩が多数いるわけなので、追い付き追い越そうと思ったら、それ以上に集中し、没頭する必要が出てくるわけです。それはそれで正しい選択でしょう。

しかし、没頭だけではいけないと私は思っています。没頭し、狭い専門に沈潜すると、外界が見えなくなるという弊害があります。このことは常に意識しておくべきことです。皆さんの多くはそのまま狭い領域を深く掘り進めていくと、狭い領域の専門家にはなれるかもしれませんが、知識の範囲が限定されてきます。そのために、研究が一息ついて、新しいことを始めようとする、専門以外のことを全く知らずに、今度は大きなハンディキャップを背負う恐れがあるのです。ある狭い専門分野で一生いける幸せな人もいるかもしれませんが、その可能性は一般に非常に小さいものです。選んだテーマがいつまでも陳腐化せず、斬新であり続けることは難しいので、一つのテーマに生涯を捧げることができた研究者は真に稀有な幸運をつかんだと言えるのです。変革の時代に生きる我々にとってはそうでないケースの方が圧倒的に多いでしょうから、一点突破のための集中と同時に自分の可能性を常に広げていく必要があるのです。

また、社会に出れば、いきなり新しいことをとやまれることがあります。新しいことを切り拓くことが、自分には必ずできるという自信を持つためには、当然のことながら、専門分野を十分に修めておく必要があります。しかし、それだけでは十分とは言えません。

守破離という言葉があります。古くは室町時代の能や戦国時代の兵法に端を発するとも言われ、芸術や武道の上達の段階を表すとされます。「しゅ」は「守る」。「は」は「破る」。「り」は「離れる」。大学院に即して言いますと、研究室に入ってそこでの得意な研究スタイルを学び、研究室の強さを「守る」。すなわち

しっかり専門を身につける段階。次に、研究室の実績を基礎に自己の工夫を加え発展させ、それまで解決できていなかった難問を打ち「破る」段階。最後は、視野を広げ、新しい分野に臨み、学んだことを「離れ」、独自に新しいものを創造する段階です。みなさんもこの「守破離」を心に刻み、段階が進むにつれて自分の視野を一層広げるように意識的に行動してください。

そして、このことは、大樹を育てることに似ています。確かにまっすぐ高く伸ばすためには、枝うちも必要ですが、それだけでなく、燦々と降り注ぐ太陽の光や豊かな栄養が必要です。自分という木を枯らさないように必要となる環境と栄養、すなわち頭の栄養となる知識を取り込めるような準備を常に行ってください。

本学には大学院を中心にして約1,800名の留学生や、海外からの研究者が在籍しています。海外の大学との学術交流協定も数多く締結し、海外での武者修行の多様な機会が準備されています。また、多くの本学の研究者が国際舞台で活躍をしています。本学のこの学術資源を有効に活用して、大学院時代に活動の場を世界に拡げて、ぜひ積極的に海外に雄飛してほしいと思います。

未曾有の大震災に見舞われた日本社会は、広い視野、柔軟な思考、難問を前にひるまない気概を持ったリーダーを必要としています。我が国あるいは人類の未来は自らの手で拓かねばなりません。みなさんが、本学の大学院生として、自由の学風をよく咀嚼し、自らが蓄積した知識や世界の常識といった既成概念からも自由になって、「問い」を自らに発しながら、課題解決への道を切り拓いていくこと、さらに、自己を十分に鍛え、頼みとできるようにする^じ自^{たんじ}鍛^じ自^じ恃^じの精神で自らの心身を磨いていかれること、この二つを願い、私のお祝いの言葉といたします。

みなさんの活躍を期待しています。大学院進入学、おめでとうございます。

大学の動き

平成26年度学部入学式

4月7日(月)午前9時30分から京都市勧業館みやこめっせにおいて、井村裕夫元総長、長尾 真元総長、尾池和夫前総長をはじめ副学長、部局長等の出席のもとに平成26年度学部入学式が挙行された。

京都大学交響楽団の演奏、合唱団による学歌斉唱に続き、総長の式辞があり、午前9時55分に終了

した。

入学式に引き続き、初年次教育の一環として、総長による講演「学び方は生き方 ～真正面から考えよう～」が実施された。

今年度の入学者数は次のとおりである。

学部入学者数

区 分 学 部	一般入試 (前 期)	外国学校 出身者選抜	外国人留学生 特別選抜	編 入 学	再 入 学	学士入学	合 計
総合人間学部	124 人	－ 人	－ 人	－ 人	1 人	－ 人	125 人
文 学 部	226	－	3	－	－	3	232
教 育 学 部	62	－	－	6	－	－	68
法 学 部	331	4	－	6	1	－	342
経 済 学 部	238	3	12	14	－	－	267
理 学 部	315	－	－	－	－	－	315
医 学 部	264	－	－	－	－	－	264
薬 学 部	82	－	1	－	－	－	83
工 学 部	969	－	30	6	－	－	1,005
農 学 部	314	－	9	－	－	－	323
合 計	2,925	7	55	32	2	3	3,024



(学務部)

平成26年度大学院入学式

4月7日(月)午後2時から京都市勧業館みやこめっせにおいて、副学長、部局長等の出席のもとに平成26年度大学院入学式が挙行された。

京都大学交響楽団の演奏、合唱団による学歌斉

唱に続き、総長の式辞があり、午後2時23分に終了した。

今年度の入学者数は、次のとおりである。

修士課程入学者数

区 分 研究科	入学	外国人留学生		合計
		国費	私費他	
文学研究科	86 人	4 人	13 人	103 人
教育学研究科	39	—	3	42
法学研究科	10	1	6	17
経済学研究科	19	2	19	40
理学研究科	268	—	3	271
医学研究科	77	4	4	85
薬学研究科	47	—	4	51
工学研究科	685	4	41	730
農学研究科	274	1	18	293
人間・環境学研究科	136	4	11	151
エネルギー科学研究科	121	—	5	126
情報学研究科	166	1	14	181
生命科学研究科	75	3	3	81
地球環境学舎	31	1	7	39
合 計	2,034	25	151	2,210



修士課程(専門職学位課程)入学者数

区分 研究科	入学	外国人留学生		合計
		国費	私費他	
法学研究科	161 ^人	— ^人	— ^人	161 ^人
医学研究科	31	1	2	34
公共政策教育部	36	1	1	38
経営管理教育部	53	3	35	91
合計	281	5	38	324

博士後期課程入学者数

区分 研究科	進学	外国人留学生		編入学	外国人留学生		再入学	外国人留学生		合計
		国費	私費他		国費	私費他		国費	私費他	
文学研究科	37 ^人	1 ^人	4 ^人	3 ^人	2 ^人	2 ^人	— ^人	— ^人	— ^人	49 ^人
教育学研究科	18	1	3	7	1	—	—	—	—	30
法学研究科	11	1	1	3	1	1	1	—	—	19
経済学研究科	20	—	6	8	—	2	—	—	—	36
理学研究科	102	1	1	15	—	4	—	—	—	123
医学研究科	18	1	—	22	1	4	—	—	—	46
薬学研究科	15	—	2	—	—	—	—	—	—	17
工学研究科	84	5	8	24	11	6	—	—	—	138
農学研究科	37	2	7	18	2	3	—	—	—	69
人間・環境学研究科	22	3	6	13	3	3	—	—	—	50
エネルギー科学研究科	7	—	—	2	—	1	—	—	—	10
情報学研究科	10	2	3	3	2	3	—	—	—	23
生命科学研究科	23	—	2	8	4	2	—	—	—	39
地球環境学舎	2	—	2	2	4	2	—	—	—	12
合計	406	17	45	128	31	33	1	—	—	661

博士課程(4年制)入学者数

区分 研究科	入学	外国人留学生		進学	外国人留学生		合計
		国費	私費他		国費	私費他	
医学研究科	166 ^人	3 ^人	7 ^人	10 ^人	— ^人	— ^人	186 ^人
薬学研究科	5	—	—	—	—	—	5
合計	171	3	7	10	—	—	191

一貫制博士課程入学者数

区分 研究科	入学	外国人留学生		編入学	外国人留学生		合計
		国費	私費他		国費	私費他	
アジア・アフリカ 地域研究研究科	23 ^人	— ^人	— ^人	— ^人	2 ^人	5 ^人	30 ^人
総合生存学館	14	—	2	—	—	—	16
合計	37	—	2	—	2	5	46

(学務部)